

# 湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

大学名 湘南医療大学  
所 属 保健医療学部看護学科  
名 前 高橋美保  
作成日 2023年8月31日

## 1. 教育の責任

本学は「人を尊び、命を尊び、個を敬愛す」という建学の理念をもとに、継続的学習力、想像力、そして課題解決能力を育む「幅広い教養教育」と、エビデンスに基づいた専門知識・技術の修得を基盤とした、責任感と使命感を持って自律的、主体的に実践能力を発展させていける医療従事者の養成を基本的使命としている。とりわけ、豊かな人間性と高度な専門性を併せ備えた人材の養成、臨床現場でチーム医療できる人材の養成、地域に必要な医療人の養成を行い、地域社会に貢献できる職業人を輩出することを主たる目的としている。

高齢化が進み、地域包括ケアシステムを基盤に、生活を重視した地域完結型の医療へと在宅ケアが推進されている中で、看護職には、予防から医療ケア、療養生活支援に至る看護のみならず、地域包括ケアシステムの一員として多岐にわたる役割が期待されている。教員は、社会状況を踏まえうえて、大学理念の具現化に向け、学習環境や体制を考えながら教育活動を行う必要がある。現在、担当している科目は以下のとおりであり、ヘルスケア看護領域(在宅看護学)の教員として看護職の育成に関する教育の責任を担っている。

### 【2023 年度前期担当科目】

#### ◇「在宅看護方法論Ⅱ」(必修 1 単位 30 時間:3 年前期)

グループワークをしながら事例を通して在宅における看護過程展開を行う。実際にグループを担当し学生同士で効果的に学習できるよう、助言を行う。また、提出された課題や記録物にもコメントを残し、さらに学習が深められるよう支援を行う。また、講義前の準備や講義後の書類整理なども行い、スムーズに講義が運営できるように科目責任者のサポートを行う。

#### ◇「統合実習」(必修 2 単位 90 時間:4 年前期)

学生が自身の関心のある課題を提示し、その課題を探究するための目的、方法、計画について記述し、論理的にレポートとしてまとめることができるよう支援する。訪問看護ステーションでの実習指導と学内での研究計画書作成指導を教員間で分担して行っている。今年度は、4人(2人×2グループ)の学生の臨地実習指導を主に担当した。毎日、訪問看護ステーションに出向き、臨地指導者と共に実習指導を行う。実習とレポートが連動した内容となるように、臨地でのカンファレンスを効果的に実施し、個々の課題に合わせて適宜軌道修正をしながら行う。

#### ◇「実践看護論Ⅵ(補完方法とフットケア)」(選択 1 単位 15 時間:4 年前期)

学生が、看護の対象となる人を統合的(ホリスティック)にとらえ、そのアプローチとしての補完療法、リラクゼーション技法について理解できるよう、科目責任者の指示に従ってサポートを行う。

## 2. 私の理念・目的

### ◇私の理念・理念をもつに至った背景

私の理念は、主体的に研鑽を積む姿勢を持ちながら周囲とともに学修、成長していくことが大切であると考えることから「自ら学び、周囲と連携、協働できる看護職の育成」を掲げたい。

私は、大学教員になるまでは、保健師として地域住民の健康支援に携わっていた。地域・在宅をフィールドとする中では、疾病を持っている個人だけが対象ではない。実際、地域住民からは、医療面だけではなく、住まい、介護、予防、生活などの多岐にわたる相談を受けてきた。最初は戸惑うこともあったが、生活という側面に着眼しながら、対象者にとって住み慣れた地域でその人らしい暮らしをしていくた

めにはどうしたらよいかを考え学修を継続してきた。また、地域で生活する個人のみならず、家族、集団、コミュニティを対象として住みやすい生活環境づくりの支援をすることも看護の目的として実践してきた。数多くの対象と関わる中では、看護職同士のみならず多職種との連携、調整、協働を図り、自身の強みであるソーシャルサポートネットワークを形成しながら看護を展開してきた。チームで支援することによって対象者に改善が見られた際には、自信、やりがい、モチベーションアップにつながった。このような経験は、私自身が地域・在宅においてより良い看護を提供しようと研鑽した結果であるとも感じた。自ら学び、周囲と連携、協働できるためには、看護に対する興味や関心を持つことや自分の言葉で他者に発信できることも大切であると思う。興味や関心を持つことは、学習の動機となり、主体的学習につながる。また、自分の言葉で他者に発信することは、考えの共有だけでなく、情報の授受を経て新たな気づきを発見することにも通じる。時には、自分の考えとは異なる他者からの指摘によって課題に気づくこともあるだろう。自分から発信し、他者の意見を柔軟に取り入れることも重要である。

現代においては、団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築が叫ばれている。変化する地域、社会の健康課題に組織的に対応できる専門職として地域の保健、医療、福祉の向上に貢献する看護職を育成していく必要があると考える。学生へ期待したいこととしては以下のことを挙げる。

1) 基礎看護学および各専門看護領域の知識と技術の応用

地域・在宅のフィールドでは看護の対象が幅広いため、看護学領域すべての知識が必要とされる。

2) 個人のみならず家族、集団、コミュニティの健康課題への支援

病院内のみで完結することなく、退院後の患者の生活やQOLといった広い視野を持ちながらの支援に目を向けることが必要。

3) 多職種との連携、調整、協働

病院内はもちろんであるが、病院外においても関係機関とのソーシャルサポートネットワークが築ける看護職を育てていきたい。そのためにも、関係機関、関係職種の役割を理解することや、他者とのコミュニケーション能力を高めていく必要がある。

4) 地域・在宅での生活を支える社会資源の活用

介護保険はもちろんインフォーマルなサービスの活用や必要なサービスがない場合には新たな開発に向けて行政等に提言できるような看護職を育てていきたい。そのためにも医療、保健、福祉の制度にも関心をもって学んでほしい。

3. 教育の方法・戦略

現時点では、在宅看護学を中心とした講義、演習や実習等のサポートを担っている。助教1年目であり、教授、准教授、講師の先生方のアドバイスを受けながら、個々の学生に合わせた指導を心がけ、行っているところである。主に3年生、4年生を中心として関わっているが、学生と向き合っていると4年間を通して学修を深め、大きく成長していくことを肌で感じる。初学者に対して専門的知識を教授する看護教育は、学生の関心を引き出し、根拠と合わせて事例を示しながら分かりやすく伝える指導力が重要である。この点において、現場での実践経験は役立てられると考える。特に、現場での保健師活動の中では、多くの関係機関との連携が不可欠であった。ネットワークづくりや多職種連携、協働に重

きを置きながら実践してきたことから、学生に対しての具体的な指導に生かすことができると考える。また、教育の方法としては、グループワークを行う場面を取り入れながら、学生同士の教えあいを重視している。このことによって、自主性の育成や他者とのコミュニケーション能力の向上を目指したい。

統合実習における訪問看護ステーションでの実習の際には、訪問看護の目的は何か、どんなことを見学、実施したのか、そこから何を学び、考えたのかを必ず確認する。実際に自分で考え、必要な看護を実践してみて成功できたと感じることができれば、さらに主体的な学習へつながるため、学生が成功体験を感じられるような機会を設定していくことも重要であると考え。また、実習を通して、在宅看護の特徴を自分の言葉で表現できるように導いていきたい。学びが不十分なところに関しては、一緒に振り返りながら指導者に確認したり、私自身の経験から補足したりして、理解が深まるように努めている。また、実習指導者とは齟齬がないように実習前からの打ち合わせを密に行い、実習中も細かなコミュニケーションをとるように心掛けている。

統合実習(在宅看護学)のレポート作成については、学生が自分の検討したい課題に合わせて研究計画書を作成している。研究に関しては、私自身が研究者としても初心者であるため、指導に際しては、教授、准教授、講師の先生方のアドバイスを受けながら行っていく必要性を感じている。学生が課題を明確にし、リサーチクエスチョンが解明されていく過程は、論理的な思考が磨かれ、エビデンスのある支援方法を見出すこと等にもつながっていくと考えられる。そのため、学生にも「これまでの学習で感じた疑問や関心事をそのままにせず、探求しながら質の高い看護を目指してほしい」「学びを深めることの面白さ」を体感してほしい。研究に関しては、最初から難しいと抵抗を示す学生も少なくない。そのため、どんなテーマに関心があるのか、明らかにしたいことは何かを引き出すことや、文献検索と一緒に取り組む等、時間をかけてディスカッションし丁寧に指導をしていく必要がある。一方で、私自身が研究において研鑽を積んでいくことが指導にもつながると考えられる。

#### 4. 学習成果

##### ◇講義について

在宅看護方法論Ⅱでは、グループワークが効果的に進められるよう口頭や書面にて助言を行った。学生同士で意見交換ができていないか確認し、ワークが滞っている場合には、こちらから質問を投げかけ、「わかった」という実感が持てるような働きかけを工夫した。学生は、グループワークを経て看護過程の展開に取り組めたことで、最終的な個人ワークも進めやすくなっている様子が見られた。

##### ◇統合実習指導について

記録や提出物についても口頭だけでなくコメントを書いて指導をしたことに対して「書かれているコメントがためになった」「教員がちゃんと見てくれている、という安心感があった」「教員とのやりとりがモチベーションアップにもつながった」との反応が得られた。また、レポート課題作成についてはメールでの質問が寄せられたため、その都度質問に回答し、一緒に考え取り組んだ。課題提出後に、学生からは「行き詰ってしまった時に相談でき、方向性が明確になった」「研究って、難しいけれど調べたり考えたりするって楽しい」等と口頭で好意的な感想を聞くことができた。

## 5. 改善のための努力

学生自らの疑問や関心につながるよう、講義、演習、実習等の場面において教員側からの働きかけを大切にしたい。そのためには、学生の小さな反応を見逃さないこと、普段から話しやすい関係性を持つような環境を作ることも必要である。レスポンスシートや授業アンケートを確認するだけでなく、そのフィードバックが大切であると考えている。

## 6. 今後の目標

### ◇短期目標

(講義)今年度から達成できるよう、取り組む

- ・小テストやレスポンスシートを活用しながら理解度を確認し、学習に役立てる
- ・一方通行ではなく、学生と教員側の双方向で理解度を確認していく
- ・学会や研修会等に参加し、知識を深める

(実習)今年度から達成できるよう、取り組む

- ・学生の疑問や関心事をその都度確認し、学習に役立てる
- ・日々の記録等はタイムリーに確認し、ポジティブなフィードバックを努める
- ・実習指導者との連携、協働を図りながら実習指導に役立てる

### ◇長期目標

(講義)

- ・教授、准教授、講師の先生方にご指導を受けながら、わかりやすい講義が実施できるよう、スキルを身につけたい

(実習)

- ・実習施設との関係性を構築しながら、同じ方向性で教育や指導を行い、学生に還元していきたい

## 【添付資料】

なし